

「現代社会に終末が訪れたことを仮想した小説『レフト・ビハインド』は、聖書のメッセージと合っているのでしょうか？」

JEC日本福音教会・一宮チャペル牧師(一宮基督教研究所主宰): 安黒務 <http://www.aguro.jp>

「いつの時代でも、**聖霊は**教会に対し、**聖書による神の啓示に忠実であるかどうかの精査を命じられる**。…おのおのの伝統を**謙虚にかつ批判的に精査し、間違っ**て神聖視されている**教えや実践を捨て去る**ことによって、**神は**歴史上のいろいろな教会の流れの中で**働いておられる**ことを認識しなければならない。」(シカゴ・コール: これは、1977年に教派的背景を異にする福音派の指導者たちと、大学、神学校関係者たちによる研究会議が開かれ、その際40名の署名をもって公表されたアピール「シカゴ・コール」の冒頭の言葉である。宇田進著『福音主義キリスト教と福音派』(いのちのことば社、1993)244頁。

【導入】

JEC日本福音教会一宮チャペル牧師で、「一宮基督教研究所」を主宰している安黒務です。今日は、大頭眞一先生の依頼を受け、「レフト・ビハインド」について講演させていただきます。冒頭の言葉は、この取り組みにおける私の基本的スタンスを示している言葉です。心に留めておいていただけたら感謝です。

さて、大頭眞一先生からの依頼の趣旨は、『百万人の福音』の記事にもありましたように「現代社会に終末が訪れたことを仮想した小説『**レフト・ビハインド**』は、**聖書のメッセージと合っているのでしょうか?**」という問いでありました。この問いに対し、私は「この教えは、聖書の教えではない、と私は考えます」とお答えしました。今日は、その理由を45分間の講演で説明させていただき、その後に皆さんからの45分間の質疑を受けたいと思います。時間に限りがありますので、講演に関する事柄をホワイトボードに図示(天地創造から新天新地、旧約と新約、神の国の概念・現在性・未来性(千年王国の強調点の比較)、キリストの受肉・贖罪・復活・昇天・再臨)、二つの終末論理解の対比(空中再臨と携挙・レフト・ビハインド→患難期とイスラエル民族の回心→地上再臨→イスラエル民族中心の千年王国回復)vs(患難期→空中・地上一体の再臨→普遍的千年王国)、三つの用語付き、聖句付き、ポイント解説付き一しておりますので、講演理解また質疑応答の際の参考にしていただければと思います。

*

『百万人の福音』では、レフト・ビハインドとは、「**後に残される**」という意味であること、そしてこの小説の**背後には、古典的と改訂のディスペンセーション主義終末論に特徴的な教えがある**こと、そしてその教えは「**突然の空中再臨(救いである携挙とレフト・ビハインド)→患難期(イスラエル民族の回心)→地上再臨(審判)→イスラエル民族中心の千年王国**」という**神の計画**を教えていると書きました。

わたしは、この「イスラエル民族の栄光の回復を軸とする聖書解釈」と「空中と地上の二つに分けられた再臨」と「空中再臨によって患難期の前に携挙される」という教えは、「使徒たちの教えではない」と考えます。**使徒たちが教えているのは、「イエス・キリストの人格とみわざを軸とする聖書解釈」であり、「空中・地上一体の単一の再臨」であり、「患難期の後の、救いと審判の再臨」であると確信しています。**

*

では、ここから、二つの終末に関する教えを比較対照しつつ、どちらが聖書の教えに合致しているのか検証していきたいと思います。

*

1. 「イスラエル民族の栄光の回復を軸とする聖書解釈」vs「イエス・キリストの人格とみわぎを軸とする聖書解釈」の対照

【ラッドの記述】

- a. さて、ラッド著『終末論』pp.6-7には、「旧約聖書において、終末的救いはいつも、イスラエル民族の民族的、神政政治の運命の視点において描かれている。旧約聖書の中にはキリスト教会についての明確な預言は存在しない。実のところ、異邦人はイスラエルの未来においてひとつの場所を与えられている。しかし異邦人の位置づけについて、旧約聖書に統一的な概念は存在しない。異邦人は、しばしば力づくで強制されてイスラエルに仕えさせられ、服従させられている。(アモス九・一二、ミカ五・九―一三、七・一六―一七、イザヤ四五・一四―一六、四九・二三、六〇・一二、一四)。他の事例においては、異邦人はイスラエルの信仰に回心し、イスラエルの神に仕えるものとしてみられている。(ゼパニヤ三・九、二〇、イザヤ二・二一―四、四二・六一―七、六〇・一一―一四、ゼカリヤ八・二〇―二三、一四・一六―一九)。イスラエルは神の民のままである。そしてそこでは、イスラエルの救いこそが未来における救いの焦点とされている。」とあります。このような“旧約の影”が、ディスペンセーション主義の影響下にある解釈法の「フレームワーク」を形作っていますね。
- b. これに対し、新約聖書では、ラッド著『終末論』p.23には、「旧約聖書の預言は、イエスの人格と使命において成就されたものは何であったのか、という視点から解釈されなければならない。つまり、旧約聖書の預言の成就是、その時点で期待されているものとは異なっている。それゆえに、再解釈を必要とする。さらに換言すると、キリスト論であるか終末論であるかは別にして、教理において最終的に権威のある言葉は、新約聖書の中に見いだされなければならない。」という“聖書解釈の原則”が教えられています。
- c. この「旧約の“イスラエル民族中心主義”の影」から解釈するのではなく、「新約の“イエス・キリストの人格とみわぎの卓越性”の光」から解釈しなければならないことがなかなか理解されないですね。「旧約聖書とは、イエスと使徒たちにとってどのような書物であったのか。彼らはどのような視点で解釈したのか」—そういうことが根本的に問われないまま、「聖書は神の言葉」信仰=イエスと使徒たちの聖書解釈原則を踏み越えた“字義的解釈”が横行している点が最大の問題だと思います。
- d. ラッド著『終末論』の一章「聖書の預言をどのように解釈すべきか」と二章「イスラエルについてはどうか」において、透徹した優れた聖書神学者としてのラッドが、指摘してやまないポイントだと思います。この基本的なポイントに盲目的な教職者が多いのに驚かされます。基礎神学教育課程に大きな欠陥・課題があると思います。神学校の基礎神学教育課程の最初に、イエスと使徒たちが有していた「聖書観」と「聖書解釈法」を徹底的に指導すべきなのです。ICIにおける継続神学教育(生涯教育課程)では、第一に、そのことに留意して

取り組み続けたいと思っています。

*

A) 「使徒的聖書解釈法とは何か」

A-1) 共通の聖書観

福音主義に立つものは「共通の聖書観」を共有していると一般に理解されている。しかし、それは物事を余りに単純化しているのではないか。ここで言う「福音主義」とは、「聖書を全面的に人間の宗教書」とみなすバーなどによって代表される自由主義の伝統や「聖書は神の啓示に対する証言」であるとするバルトによって代表される新正統主義の伝統等に対して、聖書は神の靈感によって与えられた「神のことばである」とする歴史的キリスト教の「直接的同一性の立場」を大枠で括ったものである。さらに、福音主義の立場といっても、神学的要素・歴史的要素・社会文化的要素等において多様性がある。そして聖書観、つまり靈感・無誤性・権威の理解においても、絶対的・全的・部分的といった多様性がみられる。しかし、そのような多様性を認めつつ、その中で聖書は神の靈感によって与えられた「神のことばである」という点において一定の幅で「共通の聖書観」がみられる。

A-2) 二つの物語

そのように一定の「共通の聖書観」に立ちながら、何故、二つの解釈法—ディスペンセーション主義聖書解釈法と契約主義聖書解釈法は生まれてくるのか。聖書という同じデータソースからはひとつの聖書解釈法が生まれてくるはずではないのか。それは、「旧新約のふたつの聖書の主題が大変異なっている」ところに原因がある。この現実には、聖書は神の靈感によって与えられた「神のことばである」と認める福音派の人々の間でも、十分認識されていないのではないか。一般的に聖書は全体として、平板に「神の言葉」として受容されてしまい、「聖書にはこう書いてある」と扱う光景をよくみかける。しかし現実にはそう単純ではない。旧約はイスラエル民族、選民イスラエルに関心を示し、君主制・神殿・祭司制をもつ民族として、その盛衰の歴史を描写している。その歴史は「民族的・神政政治の運命の視点」が中心である。旧約聖書の中では、イスラエルは神の民のままで、イスラエルの救いこそが未来の焦点となっている。しかし、新約聖書では大変異なった状況がみられる。イスラエルの救い主としてのイエスは、拒否され十字架につけられ、イスラエルの残りの者のみが応答した。イスラエルと教会は根本的に異なったものである。イスラエルは「民族」であり、教会は「信仰者の開かれた交わり」である。新約は、「教会の運命という主題」を扱っている。旧約聖書と新約聖書は二つの物語—イスラエルの物語と教会の物語—によって構成されている。この「ジレンマ」をどう扱うべきなのか、これが根本的な問題である。この問題意識なしに、「福音主義イスラエル論」を語ることはできない。そして、ここに二つの根本的に異なった解答が存在し、私たちは二者択一を迫られている。

A-3) 二つの聖書解釈法

私たちの前に置かれている**聖書解釈の第一の方法**は、**イスラエルは約束された土地を相続するよう運命づけられた神政政治の民族**、**今も将来も、旧約の預言が文字通り成就するとき、イエスは文字通りダビデのような王となられると捉える「ディスペンセーション主義聖書解釈法」**である。ディスペンセーション主義には数多くの特色ある教えがあるが、**最も主要な教義は「神の二つの計画と神の二つの民が存在する」というものである**。これが、**旧約と新約の二つ物語を「二つの神の民、二つの神の計画」と別個に捉えるディスペンセーション主義の極端な字義主義解釈法の真骨頂**がある。もし旧約聖書の言葉が「徹底して字義通り」に捉えなければならない、という意味で「神のことば」であるとしたら、彼らは正しいことになる。しかし、そうではない。**聖書解釈には第二の方法**がある。それは、**旧新約の「啓示の連続性・漸進性・有機的一体性」を認め、「旧約聖書を新約聖書に基づいて解釈する」方法**である。**旧約聖書には象徴、予型、預言等がある。そこに時満ちて神の御子が受肉され、贖罪のみわざを完成し、復活・昇天・神の右に着座され、聖霊を注がれた。この「事態」を受けて旧約聖書を「イエス・キリストを証しするもの」として解釈した文書が新約聖書である**ということである。

最も大切なことは、**私たちの目の前**にある**「二つの聖書解釈法」の良し悪しの審判をどこに仰ぐのか**、ということである。「聖書解釈法」の**選択権は読者の側にある**というのか。いやそうではない。**新約聖書は、パウロをはじめとする使徒たちに「旧約聖書」解釈の権威が与えられていることを明確にしている。使徒たちの「旧約聖書」解釈は、キリストのみわざの現実に直面したことにおいて、大きな変化を遂げた。これがキリスト教会の旧約聖書解釈の基点**である。**二つの聖書解釈法の良し悪しを判定する法廷は、「新約聖書」にあり、使徒たちが明らかにした聖書解釈法とは如何なるものであったのかを基準に判決が下されるべき**である。それゆえ、私はあえて「聖書解釈法とは何か」と問わない。その問いは道を誤らせる危険を内包する問いである。これが**「使徒的聖書解釈法とは何か」**を問う所以である。

さて、**私たちが留意すべき基本的な聖書解釈法とは何か**。それは、**旧約聖書の預言は「イエスの人格と使命において成就されたものは何であったのか」という視点から解釈されなければならない**、ということである。この命題を立証するため、旧約における三つのメシヤ預言の解釈を取り上げる。異教徒の憎むべきくびきから解放する「**ダビデ王たるメシヤ像**」(イザヤ書11章)、**天的な超自然的な「ダニエル書の天からの人の子像」**(ダニエル書7章13-14節)、**無力でなされるまま死に至らされる「イザヤ書の苦難のメシヤ像」**(イザヤ書53章)がある。それらは、旧約において並列しておかれ、互いの関係が不明な、大変異なった概念である。しかし新約はイエス・キリストの使命を旧約預言解釈の「**マスター・キー**」として、この三つのメシヤ思想を統合し解釈している。キリストの謙卑と高挙と再臨の段階、神の国の現在性と未来性の区別を念頭に「**イエスと彼の後継の使徒たちは、旧約聖書の預言をイエスの人格と使命の視点から解釈した。人の子は、彼が栄光に入る前に、地上に現れなければならない。そして、彼の地上における使命は、苦難のしもべの役割を成就す**

ることである。…キリスト論であるか終末論であるかは別にして、最終的に権威のある言葉は、新約聖書の中に見出されなければならない」のである。これこそが使徒たちのなした「聖書解釈」の原則であり、「使徒的正統性」の反映の度合いを判別する尺度である。

B-2) ミクロの背景—「ディスペンセーション主義イスラエル論」のベクトル

次に、上記の神学的思索の細部のベクトルとして「ディスペンセーション主義」の起源と変遷を扱う。これは、小説「レフト・ビハインド」の神学的基盤を構成しているものである。「ディスペンセーション主義」は、1800年代初期から中期の英国においてジョン・ネルソン・ダービーとプリマス・ブレザレン運動の下に出現した。それは、リベラリズムとの闘争という時代状況の中で、靈感された書物としての聖書観が危機に瀕したときに、その防御の戦いにおいて「正の貢献」があった。しかし同時に「負の遺産」を生み出した。それは、もうひとつの極端に振れた振り子のように、そこに極端な字義主義を生起させ、極端な聖書解釈をもたらした。そして19世紀と20世紀前半に米国において、ディスペンセーション主義は多様化しつつ発展していった。第一段階として「古典的ディスペンセーション主義」の立場は、「イスラエルと教会の間にある多くの相違点」を指摘し、「二つの異なった民に対する二つの別個の計画」の存在を主張した。展開の第二段階として「改訂ディスペンセーション主義」の立場が登場し時代を画した。展開の第三段階は「漸進的ディスペンセーション主義」として知られるものとして結実し、1980年代と1990年代に出現した。歓迎すべき大きな変化が起こり続けているが、「J.N.ダービーの遺伝子」とでも言うべき「民族としてのイスラエル」を軸にした理解は陰に陽に残されたままである。今日、「イスラエルを軸とした」聖書理解とか、イスラエルを軸とした「神のマスタープラン」という強調がなされることがあるが、それらの多くは上記のディスペンセーション主義聖書解釈法に由来する。

B-3) 使徒的イスラエル論とは何か

さて、マクロとミクロの背景説明を終えた今、次の課題を扱う準備が整った。前節において「使徒的聖書解釈」の原則を確認した。では、その原則に立脚した「使徒的イスラエル論」とは何なのか—これが第二の問いである。

旧約は「イスラエルの未来における救い」を見ている。しかし、新約はどうか。新約は、それらの預言が「教会において霊的に成就された」と解釈しているのか。あるいは旧約預言の字義通り「選民イスラエルのための未来を用意しておられる」と解釈しているのか。どちらなのか。契約主義神学は前者の「教会を軸とした」イスラエル論をとり、ディスペンセーション主義神学は後者の「イスラエルを軸とした」イスラエル論をとる。新約でこの課題について、最も詳しく述べている箇所はローマ人への手紙9-11章である。そのローマ人への手紙9章25節の旧約の文脈(ホセア書)では「イスラエルへの言及」である箇所の大部分が「異邦人からなるキリスト教会に適用」されている。これは、「メシヤ預言とキリスト論」の関係でみた「同じ聖書解釈の原則」が「イスラエルに関する預言と教会論」の間でもみられるということである。ここで「旧約の諸概念」は解釈され、旧約では予見不可能なことが言わ

れている。ホセア書からの引用がローマ人への手紙9章26節(ホセア書1章9-10節)にある。旧約の文脈では「字義通りのイスラエルに言及されている預言」であるが、新約では「(異邦人)教会に適用」されている。ホセア書1章10節、2章23節の預言も「教会において霊的に成就」とされ、教会は「本質的イスラエル性」を内包する「霊的イスラエル」として理解されている。アブラハムが「無割礼のときにもった信仰」の足跡は、ユダヤ人信仰者と異邦人信仰者の父となるためであったのであり、「信仰の内実」を有するアブラハムの子供が「霊的イスラエル」である。これは不可避の結論である(ローマ人への手紙4章16節, ガラテヤ書3章7節)。

ディスペンセーション主義者は、「霊的解釈」を最も危険視している。ジョン・ウォルヴォードは、それを「カトリック、リベラル、非ディスペンセーション系保守の特徴」とみている。しかし、ラッドは「旧約において字義通りのイスラエルに言及されている約束を、新約聖書が霊的教会に適用しているという原則を見出すのであるから、霊的解釈を採用しなければならない」と断言する。ここに「使徒的イスラエル理解」の原則があり、「使徒的正統性」を判別する尺度が存在する。

【エリクソンの解説】

【ディスペンセーション主義千年王国前再臨説】

ディスペンセーション主義者には、自分たちの学説をまず何よりも**聖書解釈の方法論である**と考える傾向がある。その中核にあるのは、**聖書は文字どおりに解釈されなければならないという確信**である。これは、明らかに 比喩を用いている箇所であっても文字どおりにとるべきということではなく、そのまま 意味が通るなら、さらなる解釈を施すべきではないという意味である。これは、部分的に、**預言が全く文字どおりに解釈され、かなり細かいところまで解釈されることがしばしばある**ということを意味する。具体的には、「**イスラエル**」は教会ではなく、**国家ないし民族としてのイスラエルを指すと常に解釈される**。

ディスペンセーション主義は神の言葉に一連の「ディスペンセーション」(dispensations. 摂理)、すなわち神がそのもとでこの世を管理している経綸(economies)、の証拠を見いだす。これらのディスペンセーションは、神がご自身の目的を啓示する際の連続的な段階である。それぞれが異なった救いの手段を伴うわけではない。救いの手段はいつの時代も同じである。すなわち、信仰を通して恵みによって救われるのである。ディスペンセーションの数に関しては意見が一致しないが、最も一般的な数は七つである。ディスペンセーション主義者の多くは、ある特定の聖書箇所がどのディスペンセーションに当てはまるかに気づくことが最も重要であると強調する。たとえば、千年期のために定められた教訓を用いて今の生活を管理しようとするべきではないということになる。

また、**伝統的なディスペンセーション主義者たちはイスラエルと教会との区別に大きな強調を置く**。彼らの見解では、神はイスラエルと無条件の契約を結んだ。つまり、彼らに対する約束は、ある条件を満たすかどうかには左右されない。イスラエルは神の特別な民であり続け、終わりの日には神の祝福を受ける。民族的・国家的・政治的イスラエルは決して教会と混同されてはならない。また、イスラエルに与えられた約束を、教会に当てはまるもの、教会において成就されるものとみなしてはならない。両者は二つの別々の実体である。いわば**神は、イスラエルを主役とする神の取り扱いのドラマを中断しておられるのであるが、必ず未来のある時点でイスラエルを主役としたドラマを再開される**。イスラエルに関してまだ成就されていない預言は、民族としてのイスラエルそのものにおいて成就される。教会の中で成就されるのではない。事実、旧約聖書の預言では教会について触れられていない。**教会は事実上、イスラエルを主役とする神のドラマ全体の中における、幕間の挿入のようなものである**。そのとき、ディスペンセーション主義において千年期は特別な意味をもつ。**神がイスラエルを主役とするドラマを再開するときには、それに先立って(患難期の直前)教会はこの世から取り去られる、つまり「携挙され」る**。したがって千年期は著しくユダヤ的な性格を帯びるものとなる。イスラエルに関して成就していない預言はすべてこのとき実現する。

【患難期前再臨説】

患難期前再臨説をとる人たちは、他の立場と明確に区別される独特の考え方をしている。その第一は患難時代の性質に関してである。それはまさに“大きな”患難で、歴史の中でこれに比べられるものはない。これは移行の期間であり、異邦人に対する幕間の神のドラマが終わり、千年期とその中で起こるいろいろな出来事が準備される。患難時代はどのような意味においても、信仰者を訓練したり教会をきよめたりするときであると理解されるべきではない。

患難期前再臨説の二つ目の大事な思想は、教会の携挙である。それによると、キリストは大患難の始まりに(実際にはその直前に)来て、この世から教会を取り去られる。この来臨はある意味で秘密である。信仰のない者の目はそれに気づかない。携挙はIテサロニケ4:17に描かれている。「それから、生き残っている私たちが、彼ら[キリストにある死者]と一緒に雲に包まれて引き上げられ、空中で主と会うのです。こうして私たちは、いつまでも主とともにいることとなります」。キリストは携挙の際、患難時代の終わりに教会と一緒に来臨するときとは異なり、地上まで完全に降臨されることはないということに注目するべきである(図10)。

そうすると、患難期前再臨説は、キリストは二段階で来られると主張していることになる。あるいは二度来臨されるということさえできる。また、復活は三つあることになる。第一は携挙のときの義なる死者の復活である。そのときに生きている信仰者たちが死んでいる人々に優先することはないとパウロが教えているからである。それからキリストの再臨の最後患難時代を、たちの復活がある。

以上のすべてが、患難時代には教会が存在しないことを意味する。パウロがテサロニケの人々に、信じない人々の上に神が注がれる怒りを経験することはないと約束しているので、我々も救出を期待することができる。すなわち、「神は、私たちが御怒りを受けるようにではなく、主イエス・キリストによる救いを得るように定めてくださったから」(Iテサロニケ5:9)であり、イエスは「やがて来る御怒りから私たちを救い出してください」(Iテサロニケ1:10)のである。

ところが、マタイ24章には、選ばれた者の中には患難時代に存在する者がいるという言及があるが、どういうことなのか。弟子たちが、イエスの来臨と世の終わりにはどんな前兆があるかと尋ねた(24:3。参照使徒1:6)。これはユダヤ人たちを対象にして語られた講話である。したがって、イエスのここでの議論は、主にイスラエルの未来に関係している。福音書が「教会」とか「キリストのからだ」またはそれに類した表現ではなく、一般的な「選ばれた者」という用語を使っていることには意義がある。患難時代に存在するのは教会ではなく選民ユダヤ人なのである。イスラエルと教会というこの区別は患難期前再臨説の決定的で重要な部分であり、ディスペンセーション主義と近い関係がある。患難時代を、神が主として教会を取り扱う時代から、そもそもの選民、つまりイスラエル民族との関係を再び確立する時代への転換の時と見ている。

【グルーデムの解釈】

福音主義プロテスタントの間に、イスラエルと教会の関係の問題の見方において相違が存在する。この問題は、“ディスペンセーション”の神学体系を保持する人々において顕著である。ディスペンセーション主義者によって書かれた最も広範な組織神学書であるルイス・スペーリー・シェイファーの組織神学書ⁱは、イスラエルと教会、そしてさらに旧約聖書にあるイスラエルを信じることと新約聖書にある教会を信じることの間にある多くの相違点を指摘している。シェイファーは、彼が贖われた二つの異なった人々の民に対する二つの別個の計画をもっていると主張している。イスラエルに対する神の目的と約束は地上的な祝福である。そしてそれらは未来のある時にこの地上においていつの日か成就されるであろう。他方、教会に対する神の目的と約束は天的な祝福である。それらの約束は、天において成就されるであろう。神が救われる二つの群れの間この相違は、特に千年王国において見られる。シェイファーによれば、その時にイスラエルは神の民として地上において支配し、旧約聖書の約束の成就を喜ぶ。しかし、教会は聖徒たちのためのキリストの秘密の来臨(“携挙”)のときにすでに天に挙げられている。この見方に関して、教会はペンテコステ(使徒2章)まで始まっていなかった。そして、旧約聖書時代の信仰者と新約聖書時代の信仰者をひとつの教会を構成するものとして考えることは正しくない。

シェイファーの立場は幾つかのディスペンセーションの範囲内で、より大衆的な説教においては間違いなく影響を持ち続けている。しかしより最近のディスペンセーション主義者の中の数多くの指導者たちは、それらの多くのポイントにおいてシェイファーに習っていない。ロバート・サウシー、クレイグ・プレジング、ダレル・ボックのような、最近の幾人かのディスペンセーション主義の神学者たちは、彼ら自身を“プログレッシブ・ディスペンセーション主義者ⁱⁱ”と紹介している。そして彼らは幅のある以下の事柄を手にした。彼らは、教会を神の計画の中の挿入としてはみない。彼らは教会を神の国を樹立する第一歩としてみる。プログレッシブ・ディスペンセーション主義の観点において、神はイスラエルと教会に対して二つの別個の目的をもたない。神は、イスラエルと教会が一緒に分かち合う一神の国の樹立—という単一の目的のみをもたれる。プログレッシブ・ディスペンセーション主義は、すべては神の一つの民の一部であるのだから、未来の永遠の状態においてはイスラエルと教会の間に相違を見出さない。さらに、彼らは教会は千年王国の間地上で栄光のからだにおいてキリストとともに支配すると主張する。

しかしながら、プログレッシブ・ディスペンセーション主義者と他の福音主義との間にはひとつのポイントにおいてまだ相違が残されている。彼らは、イスラエルに関する旧約聖書の預言は、なおキリストを信じる民族としてのユダヤ人によって千年王国期に成就され、あらゆる民族が見て学ぶように“模範的民族”としてイスラエルの土地に住むと言う。それゆえ、彼らは、それらの預言がなお民族としてのイスラエルに成就するゆえに、教会が“新しいイスラエル”であるとか、イスラエルについての旧約聖書の預言のすべては教会において成就するとは言わない。

この書で取り上げている立場は、この問題に関するシェイファーの観点からは少し相違する。また、プログレッシブ・ディスペンセーション主義者とも幾分かは相違する。しかしながら、未来についての聖書の預言が成就する正確な道筋への問いは、問題の性質上、確実性をもって決定することは困難であると言わなければならない。そしてそれらの事柄に関し幾分試験的な結論を手にすることは賢明なことである。このことを留意しつつ、以下のことが言える。

ディスペンセーションの立場以外のプロテスタントとカトリックの双方の神学者は、教会

は旧約聖書時代の信仰者と新約聖書時代の信仰者の両者をひとつの教会、またひとつのキリストのからだに包摂していると語ってきた。非ディスペンセーション主義的見方においてさえ、未来においてユダヤ人の大規模の回心が起こる(ローマ 11:12,15,23-24,25-26,28-31)ⁱⁱⁱ、しかしこの回心はユダヤ人信仰者が神のひとつの教会の一部と結実する—彼らは“彼ら自身のオリーブの木に再び接ぎ木”される—のみであると主張する。

この問題に関して、私たちは、教会を“新しいイスラエル”また新しい“神の民”と理解している多くの新約聖書箇所注目すべきである。「キリストは教会を愛し、御自身を彼女に与えられた」(エペソ 5:25)という事実は、このことを示唆している。さらに、教会に非常に多くのクリスチャンの救いをもたらしている現在のこの教会時代は、神の計画の中での中断とか挿入ではない。ご自身の民へと呼びだす旧約聖書を通じて明らかにされている神の計画の継続である。パウロは「外見上のユダヤ人がユダヤ人ではなく、外見上のからだの割礼が割礼なのではありません。かえって人目に隠れたユダヤ人がユダヤ人であり、文字ではなく、御霊による、心の割礼こそ割礼です。その誉れは、人からではなく、神から来るものです」(ローマ 2:28-29)と語っている。パウロは、肉的にアブラハムの子孫である人々がユダヤ人と呼ばれる文字的また生来的な意味があるけれども、“真のユダヤ人”とは人目に隠れた信仰者である人、そして心が神によってきよめられた人であるとより深く、また霊的な意味があるとはっきり認めている。

パウロは、アブラハムは肉的な意味でユダヤ人の父と考えられるだけではない、と語っている。彼はまたより深いまたより真実な意味において「彼が、割礼を受けないままで信じて義と認められるすべての人の父となり、…また割礼のある者の父となるためです。すなわち、割礼を受けているだけではなく、私たちの父アブラハムが無割礼のときに持った信仰の足跡に従って歩む者の父となるためです」(ローマ 4:11-12; cf.vv.16, 18)。それゆえ、パウロは「しかし、神のみことばが無効になったわけではありません。なぜなら、イスラエルから出る者がみな、イスラエルではなく、アブラハムから出たからといって、すべてが子どもなのではなく、『イサクから出る者があなたの子孫と呼ばれる』のだからです。すなわち、肉の子どもがそのまま神の子どもではなく、約束の子どもが子孫とみなされるのです」(ローマ 9:6-8)とすることができる。パウロはここで、最も真実な意味で“イスラエル”である人々、アブラハムの真の子供は、アブラハムの肉的な血統によるイスラエル民族ではなく、キリストを信じる人々であることを意味している。真にキリストを信じる人々は今、主によって“わが民”(ローマ 9:25、ホセア 2:23 からの引用)と呼ばれる特権にあずかっている人々である。それゆえ、教会は今神の選ばれた民である。このことは、肉によるユダヤ人は未来のある時に大規模に回心するとき、彼らは神の分離された民であり続けることはなく、彼らは「彼ら自身のものであったオリーブの木に接ぎ木」される(ローマ 11:24)。このことを示唆しているもうひとつの箇所は、ガラテヤ 3:29 の「もしあなたがたがキリストのものであれば、それによってアブラハムの子孫であり、約束による相続人なのです」である。同様に、パウロは、クリスチャンは「真の割礼の者」(ピリピ 3:3)であると語っている。

イスラエルの民から分かれた群れとしての教会について考えることから離れて、パウロは、彼らが以前は「イスラエルの国から除外され、約束の契約については他国人」(エペソ 2:12)であった。しかし、今や彼らは「キリストの血によって近い者とされた」(エペソ 2:12)と彼らに語りかけるようにエペソにいる異邦人信仰者たちに書いている。そして異邦人が教会に加えられたとき、ユダヤ人と異邦人はひとつの新しいからだに統合された。パウロは、神は「二つのものを一つにし、隔ての壁を打ちこわし、敵意を廃棄され…二つのものをご自身において新しいひとりの人に造り上げて、平和を実現するためであり、また、

両者を一つのからだとして、十字架によって神と和解させるためなのです」と語っている。それゆえ。パウロは、異邦人は「聖徒たちと同じ国民であり、神の家族なのです。あなたがたは使徒と預言者という土台の上に建てられており、キリスト・イエスご自身がその礎石です」と言うことができた。新約聖書の教会に対する旧約聖書の背景の広範な自覚に関して、パウロはなお「異邦人もまた共同の相続者となり、ともに一つのからだに連なり」(エペソ 3:6)ということが出来た。その箇所全体は、ユダヤ人信仰者と異邦人信仰者がキリストあってひとつのからだに統一されることについて力強く語っている。そしてキリストのひとつのからだである教会の包摂されずに救われ、ユダヤ民族に対する別個の計画があるとのいかなる示唆も決して与えられていない。教会は、それ自身の中にすべての真の神の民を合体させる。そして、旧約聖書の神の民に使用されてきた称号のほぼすべてがいろんな箇所で新約聖書の教会に適用されている。

ヘブル 8 章は、教会をイスラエルに関する旧約聖書の約束の受領者、そしてその成就としてみることにするもうひとつの論拠を提供している。クリスチャンが属する新しい契約について言及する脈絡において、ヘブル書の著者は、「主が、言われる。見よ。日が来る。わたしが、イスラエルの家やユダの家と新しい契約を結ぶ日が。…それらの日の後、わたしが、イスラエルの家と結ぶ契約は、これであると、主が言われる。わたしは、わたしの律法を彼らの思いの中に入れ、彼らの心に書きつける。わたしは彼らの神となり、彼らはわたしの民となる」(ヘブル 8:8-10)と言われるエレミヤ 31:31-34 からの広範な引用を与えている。ここで著者は、イスラエルの家とユダの家と新しい契約を結ぶという主の約束を引用する。そしてそれは今教会と結ばれた新しい契約であると語っている。その新しい契約は教会にいる信仰者が今一員である契約である。著者が、旧約聖書のイスラエルへの約束の成就を見出しているのは、真の神のイスラエルとしての教会であると見ているという結論を避けることは困難であると思われる。

同様に、ヤコブは多くの初期のキリスト教会への一般書簡を書いた。そして彼は「国外に散っている十二の部族へ」(ヤコブ 1:1)書き送ったと語っている。これは明らかに、彼が新約聖書のクリスチャンをイスラエルの十二部族の継承者であり、成就であると見ていることを示唆している。

ペテロもまた、同じふうに語っている。彼は「散って寄留している」読者に呼びかけている最初の節から、彼が「バビロン」(I ペテロ 5:13)と都市ローマに呼びかけているほとんど最後の節まで、ペテロはしばしば、イスラエルに与えられた旧約聖書のイメージと約束の観点で新約聖書のクリスチャンについて語っている。この主題は、神が旧約聖書におけるイスラエルへ約束された祝福のほとんどすべてを授けられたとペテロが語っている、I ペテロ 2:4-10 において顕著である。クリスチャンが神の新しい“神殿”(5 節)であるゆえに、神の御住まいはもはやエルサレムの神殿ではない。クリスチャンは今、神の御座(4-5, 9 節)に近づくことのできる真の“王である祭司”であるゆえに、神に受け入れられる犠牲をささげる祭司はもはやアロンの家系を必要としない。クリスチャンは今真の“選民”(9 節)であるから、神の選民はアブラハムから血縁的な子孫の人々であるとはもはや言われない。クリスチャンは今神の真の“聖なる国民”(9 節)であるから、神によって祝福された国民はイスラエルの国民であるとはもはや言われない。クリスチャン—ユダヤ人クリスチャンと異邦人クリスチャン—がいま“神の民”であり、“あわれみを受けた”者であるから、イスラエルの民はもはや神の民であるとはいわれない。さらに、ペテロは旧約聖書の脈絡から、神が彼に対して執拗に反逆し、彼が据えられた尊い“礎石”(6 節)を拒絶する彼の民を退けられることを繰り返し警告しているそれらの引用を取り上げている。教会は今神の真の

2021年4月15日(木), 講演13:30-14:15, 質疑応答14:15-15:30、大頭真一先生主催・凸凹神学会(ズーム形式)

「現代社会に終末が訪れたことを仮想した小説『レフト・ビハインド』は、聖書のメッセージと合っているのでしょうか？」

JEC日本福音教会・一宮チャペル牧師(一宮基督教研究所主宰): 安黒務 <http://www.aguro.jp>

イスラエルであり、旧約聖書においてイスラエルに約束されたすべての祝福を受け取る^{iv} ことを確信をもって私たちに話すために、これ以上どんな言及が必要とされるのか。

2. 「空中再臨によって患難期の前に携挙される」vs「患難期の後の、救いと審判の再臨」の対照

- i. The Blessed Hope – A Biblical Study of the Second Advent and the Rapture ”の読み方、目の付け所
- ii. この本を翻訳して教えられるポイントを少し紹介したいと思います。
- iii. 第四章「患難期、携挙、復活」において、その関連聖書箇所が丁寧に検証されています。
- iv. その結論は、「あいまいなものではなく、明白なもの」です。なぜ、このように明白な教えに対して、誤った教えが流行するのか、不思議に思います。
- v. 代表的な関連聖書箇所を検証してまいりましょう。
- a. **マタイ24章一オリーブ山での患難期についてのイエスの講話**です。
 - i. この時代の流れ(マタイ24:4-14)、
 - ii. **反キリストの出現を含む大患難の出来事**(v.15-25)、
 - iii. **大きなラッパの響きとともに、栄光の再臨**(v.31)
- b. イエスの講話と類似の、パウロ書簡の箇所は、**I テサロニケ4:16**です。
 - i. キリストの再臨、
 - ii. **トランペットの鳴り響き、**
 - iii. **携挙**
- c. もうひとつの箇所は、**II テサロニケ2:2-8**です。
 - i. 再臨がすでに起こったとか、再臨前に召された信者はどうなるのか—という疑問に対して、パウロは、
 - ii. **反キリストの出現(つまり大患難の到来)、**
 - iii. **主の日の到来の来臨の輝きによる反キリストの滅亡**
- d. 最後の箇所は、**ヨハネの黙示録3:10**
 - i. 「黙3:10 あなたは忍耐についてのわたしのことばを守ったので、
 - ii. 地上に住む者たちを試みるために**全世界に来ようとしている試練の時**には、
 - iii. **わたしもあなたを守る。」**
- e. まとめ
 - i. 旧約の出エジプトの十の災害の時のように、
 - ii. イスラエルの民がエジプトを脱出した後に、十の災害が起こったのではなく、
 - iii. **十の災害の只中で、イスラエルの民は保持され、守られ、支えられたのでした。**
 - iv. 聖書全体が、また新約聖書が、黙示録が保持するメッセージとは、
 - v. 「患難期から取り去られる」メッセージではなく
 - vi. **患難期の只中で保持されるので、殉教をも恐れず証しし続けることを励ますメッセージ**
- f. ヨハ 16:33
 - i. これらのことをあなたがたに話したのは、あなたがたがわたしにあって平安を得る

ためです。

- ii. 世にあっては苦難があります。
- iii. しかし、勇気を出しなさい。わたしはすでに世に勝ちました。」
- iv. 大患難期だけではなく、私
- v. 私たちの毎日でも大小の苦難に直面してまいります。
- vi. 第一の問題が片付けくと、第二、第三の問題が浮上してきます。
- vii. そのいみで、私たちは、「患難から逃避する生き方、また思考」ではなく、
- viii. 「患難の只中で、神さまに守られ、支えられ、その只中で殉教をも恐れず証ししていく」という
- ix. 黄金・宝石のようなメッセージに生かされていきたいと思えます。

3. 「空中と地上の二つに分けられた再臨」vs「空中・地上一体の単一の再臨」の対照

i. 関連聖句・関連用語の分析

a. 詰め“関連聖句”解釈の第一は、**パルーシア**「到来」「出現」「臨在」であり、以下の三つの聖句解釈による三手詰めである。

i. **パルーシア**は、「到来」「出現」「臨在」を意味し、**Iテサロニケ4:15-17**に記されている。

ii. Iテサ4:15-17

- 1) 私たちは主のことばによって、あなたがたに伝えます。生きている私たちは、主の来臨(パルーシア)まで残っているなら、眠った人たちより先になることは決してありません。
- 2) 4:16 すなわち、**号令と御使いのかしらの声と神のラッパの響き**とともに、主ご自身が天から下って来られます。そしてまず、キリストにある死者がよみがえり、
- 3) 4:17 それから、生き残っている私たちが、**彼らと一緒に雲に包まれて引き上げられ、空中で主と会う**のです。こうして私たちは、いつまでも主とともにいることとなります。

(a) 古いタイプのディスペンセーション主義の教えでは、「携挙」を含む空中再臨であるパルーシアは、「秘密の再臨」と教えるのだが、この聖書箇所から「秘密の再臨」を見出すことは困難である。

(b) この再臨には「号令と御使いのかしらの声と神のラッパの響き」が伴っている。

(c) 「ラザロよ、出てきなさい!」と叫ばれたイエスの叫び声は、死せるラザロを死者からの蘇生させた。

(d) 再臨における「号令とラッパの響き」は死者を目覚めさせ、復活のからだを着せるプロセスに招き入れるのに十分な大きな音である。

iii. IIテサ2:8

1) の時になると、不法の者が現れますが、主イエスは彼を御口の息をもって殺し、来臨(パルーシア)の輝きをもって滅ぼされます。

(a) さらに、キリストの来臨(パルーシア)は、教会を携挙し、死せる義人を携挙するだけでなく、不法の者、つまり反キリストを滅ぼすためにも起こる。

(b) キリストのパルーシアは「**光り輝く顕現**」であるのだから、これは明らかに「秘密の再臨」であるはずがない。

(c) さらに、この箇所はパルーシアを患難期の終わりに位置づけている。死せる聖徒たちの復活、生きている聖徒たちの携挙、そして反キリストに対する審判は、すべて同時に、すなわち患難期の終わりのイエスのパルーシアにおいて起こる。

(d) まさに、引用した箇所を比較対照することで、「**誤りのない聖書自身の“自己証言”**」を貫徹することができ、おのずとそのような自然な結論がもたらされる。

iv. マタイ24:27

1) 24:27 人の子の到来は、稲妻が東から出て西にひらめくのとちょうど同じようにして実現するのです。

- (a) 私たちは、イエスの言葉の中に、だれにも明らかな、栄光に溢れたパルシアの同じ教えを見出す。
- (b) それは、栄光に溢れ、すべての人に明らかな稲妻のひらめく電光のようである。

*

b. 詰め“関連聖句”解釈の第二は、2.アポカリュプシス「顕現」であり、以下の四つの聖句解釈による四手詰めである。

i. アポカリュプシス一主の再臨について使用されている第二のことばは、「顕現」を意味するアポカリュプシスである。

1) 患難期前再臨説の立場の人々は、

- (a) キリストのアポカリュプシスあるいは顕現を、教会の携挙とは区別し、
- (b) キリストが世界に審判をもたらすために栄光のうちに到来する患難期の終わりの出来事として位置付ける
- (c) もしこの見解が正しいとしたら、キリストのアポカリュプシスは、第一義的に「クリスチャンにとって祝福に満ちた望み」ではなくなる。
- (d) 顕現(アポカリュプシス)が起こるとき、聖徒たちはすでに携挙されており、
- (e) 肉体にあってなした行為に応じて報いをキリストの手から受け取っていることになる。
- (f) 彼らはすでにキリストのいのちと交わりの全き喜びに入っている。
- (g) すなわち、顕現(アポカリュプシス)は、悪しき者の審判のためであり、教会の救いのためのものではなくなってしまうのである。
- (h) 患難期前再臨説によれば、キリストの「秘密裡の再臨」における携挙は祝福に満ちた望みであり、好ましい期待であるが、顕現(アポカリュプシス)はそうではないということになる。

2) しかし、このような教えを聖書に見出すことはできない。

- (a) I コリ1:8 主はあなたがたを最後まで堅く保って、私たちの主イエス・キリストの日(アポカリュプシス)に責められるところがない者としてくださいます。
 - (i) 患難期前再臨説によれば、
 - (1) わたしたちは顕現(アポカリュプシス)など待つてはいない。
 - (2) 携挙を待っているのである。
 - (3) 教会は、キリストの顕現(アポカリュプシス)の時まで苦難に会わなければならない。
- (b) II テサ1:6-7 1:6 神にとって正しいこととは、あなたがたを苦しめる者には、報いとして苦しみを与え、1:7 苦しめられているあなたがたには、私たちとともに、報いとして安息を与えることです。このことは、主イエスが、燃える炎の中に、力ある御使いたちとともに天から現れる(アポカリュプシス)ときに起こります。
 - (i) 患難期前によれば、
 - (1) この迫害からの安息は
 - (2) 携挙においてすでに実現してしまっており、

- (3) イエス・キリストの顕現まで待つ必要がない。
- (ii) しかし、神のことばによれば、
 - (1) この安息は、
 - (2) 顕現(アポカリユプシス)において受け取られるべきものなのである。
- (c) I ペテ4:13 むしろ、キリストの苦難にあずかればあずかるほど、いっそう喜びなさい。キリストの栄光が現れる(アポカリユプセイ)ときにも、歓喜にあふれて喜ぶためです。
 - (i) これは、燃えさかる火の試練がキリストのアポカリユプシスにおいて初めて終結することを示唆している。
- (d) I ペテ1:7 試練で試されたあなたがたの信仰は、火で精錬されてもなお朽ちていく金よりも高価であり、イエス・キリストが現れる(アポカリユプセイ)とき、称賛と栄光と誉れをもたらします。
 - (i) 患難期前再臨説によれば、
 - (1) この栄光と栄誉は
 - (2) それよりも前の時期、
 - (3) 教会が携挙されるときに経験するものである。
 - (ii) しかし、この箇所は、
 - (1) キリストのアポカリユプシスの目的のひとつは、
 - (2) 信仰の忠実さのゆえに
 - (3) 光栄と栄誉をご自身の民にもたらすことであると断言している。
- (e) 最後に、ペテロは
 - (i) 私たちが恵みにおいて完全な者とされる望みは、
 - (ii) イエス・キリストの顕現のときにもたらされると保証している。
 - (1) もし、携挙と顕現(アポカリユプシス)がひとつの同じ出来事であるとしたら、
 - (2) それらの箇所の意味は完全なものとなる。
 - (iii) しかしながら、もしそれらの祝福が顕現(アポカリユプシス)においてではなく、
 - (1) それ以前の携挙において受け取られるものであるとしたら、
 - (2) それらの箇所はわけがわからないものになってしまう。
- (f) 顕現(アポカリユプシス)は、
 - (i) 私たちにとって、祝福に満ちた望みであり続ける。
 - (ii) それゆえ、携挙はキリストの顕現(アポカリユプシス)のときに起こらなければならない。
 - (iii) 顕現(アポカリユプシス)以前に携挙が起こるという主張は
 - (iv) 聖書のどこにも書かれていない。

*

c. 詰め“関連聖句”解釈の第三は、エピファネイア「輝き」であり、以下の三つの聖句解釈による三手詰めである。

- 1) エピファネイア—キリストの再臨について使用される第三のことばは、エピファネイアである。

- 2) エピファネイアは、「輝き」を意味する。
- ii. 患難期前再臨説の体系によれば、
- 1) 患難期が開始されるときの教会の携挙やキリストの秘密の再臨を指しているのではなく、
 - 2) 患難期の終わりにおける、
 - 3) 世界に審判をもたらすための、
 - 4) 聖徒を伴ったキリストの顕現を指している。
- iii. IIテサ2:8 その時になると、不法の者が現れますが、主イエスは彼を御口の息をもって殺し、来臨の輝き(エピファネイア)をもって滅ぼされます。
- 1) キリストは、「来臨の輝き(エピファネイア)」をもって
 - 2) 不法の人を滅ぼしてしまうのであるから、
 - 3) 実際に、それは顕現(アポカリュプシス)と同様の意味において使用されている。
 - 4) キリストがエピファニー(輝き)をもって出現するのが、
 - 5) 患難期の終わりであることは明らかである。
- iv. しかし、キリストのこのエピファニー(来臨の輝き)は、
- 1) キリストのアポカリュプシス(顕現)と同様に
 - 2) 信仰者の望みの対象である。
 - 3) もし教会が前もって携挙のときに望みの対象を受け取っていたのなら、
 - 4) そうなることはあり得ないからである。
- d. パウロは、Iテモ6:14 私たちの主イエス・キリストの現れ(エピファネイアス)の時まで、あなたは汚れなく、非難されるところなく、命令を守りなさい。と勧告している。
- e. IIテモ4:8 あとは、義の栄冠が私のために用意されているだけです。その日には、正しいさばき主である主が、それを私に授けてくださいます。私だけでなく、主の現れ(エピファネイアン)を慕い求めている人には、だれにでも授けてくださるのです。
- i. と語り、自分が勇敢に戦い、そしてキリストの裁きの御座において
- ii. 報酬を受け取る日を待ち望んでいる確信を表明している。
- 1) このような箇所から、
 - 2) パウロが報酬の日として期待している「その日」が
 - 3) キリストのエピファニーの日であるとしたら
 - 4) 結論できない。
- iii. したがって、それはクリスチャンが愛情を注いでいる日、
- 1) クリスチャンの望みの対象である。
 - 2) そして、それは信仰者に報酬が授けられる日である。
- iv. 患難期前再臨説は
- 1) 報酬が与えられる審判を携挙と顕現の間に位置づけている。
- v. しかし、ここでは、患難期の終わりのエピファニーの時に位置づけられている。
- 1) は顕現(アポカリュプシス)と同じ時である。
- vi. ここで熟考されている事柄は、テトス2:13-14で決着
- f. 2:13 祝福に満ちた望み、すなわち、大いなる神であり私たちの救い主であるイエス・キリストの、栄光ある現れ(エピファニー)を待ち望むように教えています。2:14 キリストは、私たちをすべての不法から贖い出し、良いわざに熱心な選びの民をご自

分のものとしてきよめるため、私たちのためにご自分を献げられたのです

i. 教会の「祝福に満ちた望み」とは、

- 1) 大いなる神であり、私たちの救い主であるキリスト・イエスの
- 2) 栄光ある現れ(エピファニー)なのである。
- 3) 教会の携挙の時期とキリストの顕現(アポカリュプシス)と輝き(エピファニー)の時期
- 4) かなりの隔たりがあるとしたら、まことに奇妙なことになってしまう

ii. 患難期前再臨説によれば

- 1) 患難期の終わりのキリストの再臨は、
- 2) 聖徒に対する報酬、義なる者の救いとか
- 3) 無関係なものになってしまう。
- 4) 死んだ者はすでによみがえらされ
- 5) 生きている者はすでに復活のからだに変えられている。
- 6) 行いに対する審判評価もすでに過去のものとなり、
- 7) 忠実なしもべたちに対する報酬はすでに与えられている。
- 8) 患難期の終わりのキリストの顕現(アポカリュプシス)と輝き(エピファネイア)は
- 9) 救いではなく、
- 10) 審判を目的とするものになってしまう。

iii. しかし、神の言葉によれば、

- 1) この輝き(エピファニー)は、
- 2) 私たちの「祝福に満ちた望み」である。
- 3) それは、私たちが報いを受けるときであり、
- 4) すべての不法から贖い出され、
- 5) 神の全き所有物となるべくきよめられるときであり、
- 6) キリストとの交わりにおいて完全にひとつにされる
- 7) 「祝福に満ちた望み」である。

iv. このようなわけで、教会の携挙は

- 1) 輝き(エピファニー)の七年前ではなく、
- 2) 輝き(エピファニー)のときに起こる
- 3) と結論できる。

*

g. C. 分析の総合評価

i. たとえ、どのようなことばを作り出せるとしても、

- 1) 主のパルーシア、アポカリュプシス、エピファニーの間にはどのような区別もない。
- 2) それらは、ひとつの、同一の出来事である。
- 3) キリストの顕現(アポカリュプシス)は、審判のみに関連した出来事ではない。
- 4) そのことは、聖書における顕現(アポカリュプシス)と輝き(エピファニー)の
- 5) ことばの使い方から明らかである。

ii. それはまた、信仰者の望みが

- 1) その上に置かれている日であり、
 - 2) その日に信仰者は、
 - 3) キリストの再臨時に
 - 4) 救いの完全な祝福に入れられる。
- iii. 教会の携挙とキリストの顕現(アポカリユプシス)との区別は
- 1) 神のことばによってどこにおいても主張されていないし、
 - 2) キリストの再臨に関する用語によっても要請されていない
 - 3) と結論を出せる。
- iv. むしろ、反対に、どのような推論ができるとしても、
- 1) それらの用語は、
 - 2) キリストの顕現(アポカリユプシス)が携挙と同様
 - 3) 主との全き交わりに入るときであり、
 - 4) 主の手から報酬を受け取るとき、
 - 5) つまり、信仰者の救いの日であることを示唆している。
- v. パルーシア、アポカリユプシス、エピファニーは
- 1) 単一の出来事である。
 - 2) キリストの再臨を二つの部分に分割することは、
 - 3) 立証されえない“推測”にすぎない。
 - 4) 主の来臨について使用されている語彙は、
 - 5) キリストの二つの到来または到来の二つの局面があるという見解に
 - 6) いかなる支持も与えていない。
- vi. 反対に、キリストの来臨が
- 1) 単一、かつ不可分な
 - 2) 栄光に満ちた出来事である
 - 3) という見解を立証している。
- *
- h. D. 結語
- i. <ローザンヌ誓約・第15項、キリストの再臨>には、「私たちは、イエス・キリストが救いと審判を完うするために、力と栄光のうちに、人格的、可視的に再臨されることを信じる」と誓約されている。
 - ii. この再臨の出来事は、患難期の後に生起する、携挙を含む空中・地上一体の単一の再臨であることを聖書が“自己証言”していることを見てきた。
 - iii. 私たちは、旧約聖書の影―「イスラエル民族の栄光の回復」を軸とした解釈原則、つまり使徒たちとは異なる解釈方法に縛られるべきではない。新約の使徒たちの「福音理解」を歪曲すべきではない。新約聖書の光―「イエス・キリストの人格とみわぎの卓越性」を軸とした解釈原則にのっとり、新約聖書自身の“自己証言”している自然な理解に立脚すべきである。
 - iv. キリストは「眠った者の初穂」として死者の中からよみがえられた(I コリント 15:20)、私たちは「終わりのラッパとともに、たちまち、一瞬のうちに変えられる。ラッパが鳴ると、死者は朽ちないものによみがえり、私たちは変えられる。この朽

ちるべきものが、朽ちないものを必ず着ることになり、この死ぬべきものが、死なないものを必ず着ることになる」(15:52-53)。

- v. 私たちは、約二千年前のキリストの復活の日、イースターを振り返りつつ、今日私たちは私たちのイースターの日—復活のからだを着せられる日—「祝福に満ちた望み」(テトス2:13)の日を待ち望みたい。

【付記】

この問いに答えるに際して、ひとこと申し上げたいことがあります。この講演において、「ディスペンセーション主義」を取り上げますが、ディスペンセーション主義といっても、…と多様性があります。また、ディスペンセーション主義には、正の貢献もありますし、負の遺産もあります。また、福音主義的聖書観に立つ兄弟姉妹たちとして、「福音理解における共通項」もまた広く深いものがあります。終末論においては、…という共通項と…という相違点があります。今日は、その相違点が聖書解釈において健全なのか、不健全なのかを識別・精査・克服の取り組みをさせていただきます。ある人は、私のことを「ディスペンセーション主義者に敵対する者」のように言われますが、そうではなく、「傷つき、誤りの中に倒れているディスペンセーション主義者への“良きサマリヤ人”」なのです。

有名なシカゴ・コールという声明にありますように、「いつの時代でも、聖霊は教会に対し、聖書による神の啓示に忠実であるかどうかの精査を命じられる。…おのおのの伝統を謙虚にかつ批判的に精査し、間違っって神聖視されている教えや実践を捨て去ることによって、神は歴史上のいろいろな教会の流れの中で働いておられることを認識しなければならない。」(シカゴ・コール: これは、1977年に教派的背景を異にする福音派の指導者たちと、大学、神学校関係者たちによる研究会議が開かれ、その際40名の署名をもって公表されたアピール「シカゴ・コール」の冒頭の言葉である。宇田進著『福音主義キリスト教と福音派』(いのちのことば社、1993)244頁)

「レフト・ビハインド」という小説には、古いタイプのディスペンセーション主義の教えを基盤にして、興味深い「終末の世界」のストーリーが描かれている。米国のポップ・カルチャー、大衆文化として、シリーズ全体で6500万部売れたという。それらの購入者は、熱心な福音派のクリスチャンたちであり、特に婦人層に人気があったという。そのあたりの様子は、関西学院大学の栗林輝夫教授の『キリスト教帝国アメリカ』「第四章 宗教から読むイスラエルとイラク戦争—『終わりの日の神学』がある、ポップカルチャーが描く黙示録の世界、大ヒット『レフト・ビハインドの謎』、ウエスト・バンク・ガザ入植は預言の成就、等」に手際よくまとめられている。

〒671-4135 兵庫県宍粟市一宮町安黒332一宮基督教研究所
安黒務:Mail : tsutomuaguro@gmail.com , Tel: 080-7813-8528

「現代社会に終末が訪れたことを仮想した小説『レフト・ビハインド』は、聖書のメッセージと合っているのでしょうか？」

JEC日本福音教会・一宮チャペル牧師(一宮基督教研究所主宰): 安黒務 <http://www.aguro.jp>

ICIホームページ:<http://www.aguro.jp/>

ICIツイッター:<https://twitter.com/tsutomuaguro>

ICIフェイスブック:<https://www.facebook.com/tsutomu.aguro>

ICIユーチューブ:<http://www.youtube.com/c/AguroTsutomu>

郵便振替口座:「一宮基督教研究所」01110-0-15025

楽天銀行, マーチ支店211, 普通預金, 口座番号1834884, 口座名 安黒務

i ルイス・スペーリー・シェイファー、『組織神学』。通常ディスペンセーション主義者に特徴的な幾つもの特有の教理があるけれども、おそらく神の全包括的な計画における二つの民としてのイスラエルと教会の相違が最も重要である。ディスペンセーション主義者によって保持されている他の教理には通常、大患難期前の天への教会携挙、イスラエルに関する旧約聖書預言の未来における文字通りの成就、神の民に関する神の取り扱い方の七つの時期あるいは“ディスペンセーション”に聖書の歴史を分けること、教会時代を時代の間神の計画における挿入として理解すること、主としてユダヤ人がイエスを彼らのメシヤとして拒否したときに制定された挿入。しかしながら、今日の多くのディスペンセーション主義者はそれらの特徴の幾つかを修正したりあるいは拒否したりしている。体系としてのディスペンセーション主義は、英国のJ.N.ダービー(1800-1882)の著作をもって始められた。そしてスコフィールド・リファレンス・バイブルを通して米国で広まった。

ii 参照: Robert L. Saucy, *The Case for Progressive Dispensationalism*(Grand Rapids: Zondervan, 1993), and Darrell L. Bock and Craig A. Blaising, eds., *Progressive Dispensationalism*(Wheaton: Victor, 1993). John S. Feinberg, ed., *Continuity and Discontinuity: Perspectives on the Relationship Between the Old and New Testaments*(Wheaton: Crossway, 1988)

iii 私はディスペンセーション主義者ではないけれども、その用語を通常理解されている意味において、ローマ 9-11 章は未来におけるユダヤ人の大規模な回心を教えていると確信している。

iv ディスペンセーション主義者は、教会がイスラエルに関する旧約聖書預言の多くの**適用**の受領者であるとする。しかしそれらの約束の**真の成就**は今なお民族としてのイスラエルの未来においてもたらされるという点を許容する。しかし、教会へのそれらの約束についての、それらすべての明確な適用の新約聖書の実例に関して、このことが本当に、神がそれらの約束を与えようとしておられる唯一無二の成就であることを否定するいかなる強固な理由も存在しているようには思われない。